地域自給を基本とした循環型社会へ

―ゴミ問題の本質は過剰消費―

東　龍夫

ひがし・たつお
1952年生まれ、46才
原子力発電問題、ゴミ問題等さまざまな市民運動にかかわる。資源リサイクル業・㈲ひがしリサイクルサービス代表取締役。札幌市資源リサイクル事業協同組合副理事長、環境庁登録・環境カウンセラー（事業者部門・市民部門）1996～98年札幌市環境保全協議会委員・同審議会委員として同環境基本計画作りにかかわる。

本文のねらい・要点

一般に言われているゴミ問題についての捉え方は、焼却技術や埋立て技術の技術問題に矮小化されたり、個人のリサイクルの努力という問題になりがちである。しかし、ことは地球全体を巻き込んだ、現代工業文明そのものの問題なのである。

『永続可能な社会』

一九九二年、ブラジルのリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連ブラジル会議」（いわゆる地球環境サミット）。その会議の有名なキーワードが、サスティナブル・デベロップメントである。その一般的な日本語訳は「持続可能な開発」であるが、その訳語に違和感を持つのは、私だけではないだろう。大量生産・大量消費・大量廃棄型の二〇世紀工業文明が、環境問題にとどまらず、地域社会の崩壊や人々の心の奥まで蝕み、生物にとって最も基本的な営みである生命の再生産まで脅かしている。現在さまざまな形で顕在化しつつある環境汚染・環境破壊の問題は、正に文明論的転換なくしては、解決することができないと私は思う。

そのような認識に立てば、現在の大量生産型工業社会を前提としたような、「持続可能な開発」という訳語は、意図的でさえある。

アメリカインディアンのある種族には、『いまの自分たちの世代にとってどんなに良いことであろうとも、七世代先の子孫に悪い結果をもたらすことであれば、それをしてはいけない』という言い伝えがあるという。この言葉は目先の利益を極限にまで追求してきた工業文明への痛烈な批判であるとともに、地球環境サミットのキーワードとも見事に符合する。サスティナブルの訳語は、価値観の転換を含んだ言葉として「永続可能な」という言葉を当てるべきだと私は思う。

ではデベロップメントはどうだろうか？「開発」という言葉でイメージすることは、巨大ダム開発とか高層ビルの建設とかではないだろうか？デベロップメントを「発展」と訳す場合もある。人類の発展、都市の発展……。言葉の問題というよりも、「開発とは何か？発展とは何か？」そして「これまでの開発とか発展とかが、私たちを本当に幸せにしたのか？」、という自問が重要だと思う。

私はリオの地球環境サミットに、「国連環境ブラジル会議市民連絡会」というＮＧＯの一員として参加した（この連絡会は発展的に解消して二〇〇一フォーラムというＮＧＯとして現在多様な活動をしている）。国連の公式会議と並行して開催された「ＮＧＯグローバルフォーラム」には、世界各国の環境問題に取り組む市民が、強い危機感を持って空前の規模で参加した。その中で明らかになったことがある。

『北側の先進工業国に住む世界人口の二割の人々が地球全体の資源・エネルギーの八割を消費している。富裕層と言われる世界人口の二〇％の人々が、世界の富の八三％以上を握っている。もし世界中の人々が、日本人やアメリカ人と同じようにクルマを乗りまわし、毎日大量の食べ残しのゴミを生むような生活をしたらどうなるか？世界は一気にカタストロフィーを迎えるだろう。』

これが、まぎれもない現実であった。

「あなたがた北側先進国の人々が、地球が温暖化するからと言って、我々南側の人間に『クルマを持つな』と言えるのか？牧場開発によって森林が失われるからと言って『肉を食うな』と言えるのか？」

私たちはこの問いにどう答えるのか？

日本やアメリカを筆頭にした北側先進諸国の過剰な消費が環境問題の本質である。

日本におけるゴミ問題の本質も正にここにある。世界一の天然資源（半製品・製品も含む）の輸入国である日本は、毎年八億トンを輸入し、七千万トンを輸出している。ゴミがあふれるのは当然なのだ。

『アルミ缶は環境破壊型容器』

私はこの地球環境サミットへの参加をきっかけに、ほんの少しライフスタイルを変えた。アルミ缶入りのビールを飲むのをやめたのだ（もちろんジュースやコーラも）。

御承知のように、アルミという金属はボーキサイトという鉱石を、電気精錬して作られる。三五〇cc入りの一番一般的なアルミ缶を作るのに、五〇〇ワットの電力が必要だ。石油危機（その後、三〇年近くたっているのに、石油が枯渇するという話しは、とんと聞かないが？）の時には、「この缶を作るには、この缶一杯の石油が必要です」などと言われた。それは、石油火力発電所で発電した電力で作れば、ということに他ならない。要するに、「アルミ缶は電気の缶詰め」なのである。ところで、このアルミ缶を作るのに一体いくらかかるのか御存知ですか？もし日本国内でボーキサイトから電気精錬して作ったら、おそらく一本四〇円近くなるだろう（日本の電気料金は世界一高いと言われている）。実際には、アルミ缶の原料になるアルミの新地金（回収したアルミ缶などを溶かして作った地金は再生地金という）は、世界中から輸入されていて、アルミ缶の値段は一本二〇円くらいだと言われている。アルミ缶は飲料容器としては高価な容器であり、缶ビールは大ビン入りのビールに比べて二〇％近く高くついている。

海外ではそのアルミの電気精錬に使う電力は、ほとんど大規模な水力発電所から得ている。アメリカ・カナダ・ロシア・オーストラリア・ブラジル・インドネシアなど、いずれも広い国土と大きな川を持つ国で電気精錬されて、日本に輸入されている。

その中のひとつ、ブラジル・パラ州のベレン（人口一七〇万人）という赤道直下では世界最大の都市にアルミ精錬工場がある。このベレンという地球の裏側にある港から、はるばるアルミが運ばれてきて、私たちは自動販売機の中の缶ビールと御対面している訳である。このベレンのアルミ製錬所に電力を供給しているのが、トゥクルイ水力発電所である。トゥクルイダムは、世界一の大河であるアマゾン川の支流であるトカンティンス川にある。支流と言っても日本の川の常識には当てはまらない。トゥクルイダムの堤防の長さは何と一九キロメートル！ダムによって水没した面積は二、〇〇〇平方キロメートルだと言う。一口に二、〇〇〇平方キロメートルと言っても、仲々ピンとこないだろうが、札幌市全域の面積が一、一八平方キロメートルだと言ったら想像する助けになるだろうか？

その広大な水没した土地には、かつては熱帯雨林が広がっていた。熱帯雨林の希少性については言うまでもないだろう。さらにその森には多くの貴重な動植物とともに、インディオと言われる人々が住んでいた。彼らはダム建設の計画を知って大規模な抗議行動を起し、そのことは一部のジャーナリストによって日本へも伝えられた。しかし、ダム建設は強行され我々は缶ビールを飲み続けている。

インディオの人々にとって、森は生活の全てである。私たち都会に住む人間にとっての自然環境としての森とはちがう。彼らにとって森とは、食糧を得る源であり、病を癒す薬草を提供する病院であり、生活の道具を生み出す工場である。その全てを彼らはダムによって失った。わずかな保障金が支払われたようであるが、それによって何が保障されたと言うのか……。住む場所を失ったインディオの人々は、やむなく街へ出ることになった。しかし彼らに街で暮らす術があるはずもなく、スラム（ブラジルではファベーラ）の住人になるしかなかったのである。

アマゾンでは第二、第三のトゥクルイダム（確認してないがもう出来ているかも知れない）の計画があると言う。

自動販売機で缶ビールを買うという、日本では当たり前のことが、大規模な環境破壊と何千年も森と共に暮らしてきたインディオの人々の生活を奪うことによって成り立っている。これを過剰消費と言わずに、何と言おうか？。

『地域自給を基本とした循環型社会へ』

アルミ缶の例はほんの一例である。鉱物資源に限らず衣・食・住全てに渡って、我々の過剰消費

は地球の隅々にまで影響を与えている。もうひとつだけ、ごく最近のことを報告したい。

先日、ひょんなことから同じ南米のエクアドルの市長さんを我家に泊めることになった。エクアドル・コタカチ市の市長アウキさんは、三三才というエクアドル最年少の市長であり、数少ない先住民族出身の市長である。日本のNGOの招きにより来日し、日本と密接に関係のあるコタカチでの銅山開発の問題について訴えるために、全国で講演し札幌に立ち寄った。

風光明媚なアンデスのすそ野にあるコタカチ市に、日本の資金援助によって銅山開発計画が現在進行中であると言う。市民は誰も望まず誰も利益も得ず、市長を先頭にしてこの開発にこぞって反対している。「足尾鉱毒事件を経験している日本の市民ならわかってくれるはず」と言う思いで彼は来日した。

地球環境サミットから六年、まだ日本人はこんなことをしているのか、という思いが私には強い。アウキさんは市長として、地域の永続可能な発展についてこう語った。『我々に毒を流す銅山開発は必要ありません。我々は、有機農業による農産物の生産と、伝統工芸品、そしてエコツーリズムの三つを基本にしてやっていきたい。』

私は市長としての彼の政策が、これからのグローバル・スタンダードになると思った。何故なら、北海道に住む我々にとってもその三つは未来へのキーワードになりつつあるからである。

地球環境問題というと、二酸化炭素による温暖化、フロンガスのオゾン層破壊、酸性雨などということになりがちだが、それだけではない。「便利で豊か」と言われている我々のライフスタイルそのものが、地球の隅々にまで影響を与え、地域の環境を破壊し、そこに住む人々の暮しを脅かしている。繰り返すがゴミ問題はその結果にすぎない。大量のダイオキシンを発生させて生命の存続をも脅かしているゴミ焼却工場も、もとはと言えばあふれるゴミを効率よく始末するためのものである。ダイオキシンの発生抑制を技術の問題として解決しようとしているが、それはゴミ問題の本質を先送りするだけである。

ではどうするか?

第一に私たちが考えなければならないのは、ゴミそのものの発生が少ない社会経済システムを新たに(もしくは温故知新も含めて)作り出す努力をしなければならないと言うことである。その基本は、地域資源を活用して生産し、地域の人々が消費し、そこから発生する廃棄資源を再生資源として地域で再生産するシステム――地域自給を基本とした循環型社会の構築こそが、我々が果すべき地球的課題であると、私は思う。その具体的なひとつひとつを語る余裕は、またの機会に譲るとして、最後に一言。化学物質汚染を含めたゴミ問題の解決なくしては、健全な自然環境を維持することはできない。自然環境を維持することができなければ、我々人間自身の健やかな未来もまたないのではないだろうか。